

漢三國六朝紀年鏡圖說

梅原 吉



文學博士 梅原末治 編著

漢三國六朝紀年鏡圖說

京都帝國大學文學部
考古學資料叢刊 第一冊

昭和十七年

京都

桑名文星堂刊行

序 言

東亞古代の中核たる支那の考古學研究は近年遺跡の學術發掘に伴ふ正確なる資料の檢出に依り、輝しい發足を遂げて、今や同國從來の古文物觀を一新しようとしてゐる。處がこの發掘調査が他方に於いて唐宋時代以後古物への愛着に基く蒐集と觀賞の行はれたその國柄からする世上に夥しい既出の遺物類に對し、それ等が游離したものと
言ふ見地から閑却される様な傾向が見受けられるのは、なほ未開拓な分野の多い同國
考古學の基礎の確立に向つて妥當な現象とは言ひ得ない。凡そ考古學研究は個々の
遺物自體に卽した觀察から出發するものであり、また古代の遺物の個々がそれ〴〵獨
自のものたる以上、よしや既往の關係遺品が出土地の所傳や伴出遺物等に於いて詳な
らぬ點から學術資料として望ましからぬものがあるとしても、その故に直ちに是等の
調査考察が等閑視せられてよい筈はない。いはんや支那の如く、様な資料が夥しく
てなほ發掘調査の資料のみに依る考古學上の立論を近き將來に期し難い現状にある
場合に、あつては、是等の遺品の蒐集調査を行ふて遺物自體の全貌を知ることが、また
ま見出される發掘調査に依る根本資料の効果をより充分に發揮せしめる重要な根幹
をなすものである。單に公式的に、發掘調査に依る資料の重要性のみを取り上げて、他
を顧みないが如きは決して正しい成果を擧げ得る途ではないのである。

以上の見地から本考古學教室にあつては、故濱田教授の經營せられてゐた頃から、遺跡の學術調査に依る學界新分野の開拓と共に、また右の方面への留意が加へられ、關係の資料集として大正十三年に教授の編著に係る『支那古明器泥象圖說』の刊行を見た事であり、それは既出の關係遺品の集成の上に、一部學術調査の結果を加へて、全般の正しい解釋を所期したものであつた。たゞこの種の分野の業績は、蒐集の量と整理とが一度に達するにあらずんば、好事家の雜記と撰ぶ所なきに墮する懸念が多い。従つて其後教授の御在任中遂に同様な書冊の續刊を見るに至らずして止んだのであつたが、近年内外公私の人士の援助の結果、教室に於ける支那關係遺品の資料蒐集は漸次その量を加へ、質に於いても亦注意すべきものを見受け、是等が時に傳へられる發掘調査の結果に依つて、研究資料としての價值を正しく示すことの考へられるものがある様になつて來た。されば故教授の前編著を承けて、學界に資料を提供すると共に、併せてそれに關聯した所見を録する爲に、新たに『考古學資料叢刊』として順次是等を公刊する計畫を立てたのである。本書はその第一冊をなすものであつて、支那の漢代から六朝末に至る紀年銘ある古鏡を集成し、その一々に解説を加へ、然る後に是等の綜觀を試みたものに外ならぬ。この種遺品は大正の初年故高橋富岡兩先生がそれに基くすぐれた研究を公にせられて以來、筆者が引續き留意して資料の蒐集と考察とを行ふて來たものであり、今や略々基準の確立した支那古鏡沿革考に密接な關係を持つ點で、單に資料

集としても意義あることを私かに信ずるのである。今年今月故教授の歿後困難な教室の處理に當つてよく吾々を指導し、今日あらしめられた羽田博士が目出度い還曆を迎へられた。即ち教室としてこの新たな叢刊の第一冊を先生に捧げて、その壽の窮りなきを念願する微意を致し、兼てまた本書の續刊を私に所期する次第である。

最後に本書の資料調査に當つて便宜を與へられた諸家―その芳名は一々の解説の條に記して置いた―に謝意を表すると共に、この營利的でない書冊の公刊に當つた桑名文星堂關係者の厚意をも感謝したい。

昭和十七年五月十五日

京都帝國大學文學部考古學教室にて

梅 原 末 治

本文目次

序	説	一頁
---	---	----

各	説	五
---	---	---

第一	漢代の紀年鏡	五
----	--------	---

第二	魏の紀年鏡	四
----	-------	---

第三	吳の紀年鏡	五四
----	-------	----

第四	六朝の紀年鏡	一〇一
----	--------	-----

後	論	一三
---	---	----

附 載

支那紀年鏡の贋作品に就て	一四五
--------------	-----

圖版目次

第一	(一) 朝鮮樂浪古墳出土漢居攝元年内行花文精白式鏡	六·七·一三·一三三
第二	(二) 傳浙江省紹興出土王莽始建國天鳳二年方格規矩四神鏡拓影	一〇·一一·一三〇
第三	王莽始建國二年規矩獸帶鏡拓影	八·九·一三〇
第四	漢永平七年内行花文鏡	一一·一二·一三·一三三·一三八
第五	傳浙江省紹興出土漢永平七年尙方獸帶鏡	二一·二四·一三三·一三四
第六	漢元興元年環狀乳神獸鏡圖(上)及拓影(下)	一四·一六·二六
第七	傳河南省洛陽出土漢永嘉元年夔鳳鏡拓影	一七·一九·一三三·一三四
第八	漢永壽二年獸首鏡	一九·二〇·二五·二六
第九	(一) 漢永壽二年獸鈕獸首鏡	二〇·二五·二六
第一〇	(二) 漢延熹七年獸首鏡	二三·二四·二五·二六
第一一	(一) 漢延熹二年環狀乳神獸鏡	二〇·二二·二六
	(二) 漢延熹三年半圓方形帶神獸鏡拓影	二二·二三
	傳朝鮮樂浪古墳出土漢延熹七年獸鈕獸首鏡	二三·二三·二五·二六
	(一) 漢延熹九年獸首鏡	二四·二五·二六
	(二) 漢永康元年獸首鏡	二五·二五·二六

本文對照頁

第一二	(一) 漢永康元年環狀乳神獸鏡	二五·二六·二六
	(二) 漢光和元年獸首鏡	二九·三〇·二五·二六
第一三	(一) 漢熹平二年環狀乳神獸鏡拓影	二七·二八·二六
	(二) 漢熹平元年神獸鏡拓影	二七
第一四	漢熹平三年獸鈕獸首鏡	二六·二九·二五·二六
第一五	(一) 漢中平六年四獸鏡	三〇·三一·二四·二五
	(二) 漢建安七年半圓方形帶神獸鏡	三三·三三
第一六	(一) 漢建安元年重列神獸鏡拓影	三三·三三·二六·二七
	(二) 漢建安十年朱氏重列神獸鏡拓影	三三·三三·二六·二七
第一七	(一) 漢建安十年朱氏重列神獸鏡	三三·三三·二六·二七
	(二) 漢建安十年朱氏重列神獸鏡	三三·三三·二六·二七
第一八	(一) 漢建安十年五月重列神獸鏡	三三·三三·二六·二七
	(二) 漢建安十四年半圓方形帶神獸鏡	三三·三三·二六·二七
第一九	傳浙江省紹興出土漢建安二十二年重列神獸鏡 二面	三七·三六·二六·二七
第二〇	(一) 漢建安廿四年正月神獸鏡拓影	三六·三六
	(二) 漢建安廿四年四月半圓方形帶神獸鏡拓影	三六·三六
第二一	(一) 漢建安廿四年六月半圓方形帶神獸鏡	四一·四二

第二二	(一) 傳紹興出土漢建安廿四年正月神獸鏡 三八·亮
	(二) 漢建安廿四年重列神獸鏡拓影 四一
第二三	(一) 傳紹興出土漢延康元年半圓方形帶神獸鏡 四三
	(二) 傳長沙出土魏黃初二年半圓方形帶神獸鏡 四四·四五
第二四	(一) 魏景元四年規矩花文鏡 五三·五四·一三〇
	(二) 魏黃初三年神獸鏡 四五·四六
第二五	(一) 魏黃初三年神獸鏡 四五·四六
	(二) 上野國群馬郡大類村芝崎古墳出土魏 <u>正</u> 始元年三角緣神獸鏡 四七·四九
第二六	但馬國出石郡神美村森尾古墳出土魏 <u>正</u> 始元年三角緣神獸鏡 四七·四九
第二七	(一) 魏甘露四年獸首鏡拓影 五二·五三·二五·二六
	(二) 魏甘露五年獸首鏡拓影 五二·五三·二五·二六
第二八	魏甘露五年獸首鏡 五三·五三·二五·二六·二四〇
第二九	魏甘露五年獸首鏡 五三·五三·二五·二六·二四〇
第三〇	(一) 吳黃武元年半圓方形帶神獸鏡拓影 五五·五六
	(二) 吳黃武二年神獸鏡拓影 五五·五六
第三一	(一) 吳黃武六年重列神獸鏡 五九·六〇·二六·二七
	(二) 吳黃武六年重列神獸鏡拓影 五九·六〇·二六·二七

第三二	(一) 傳紹興出土吳黃武四年半圓方形帶神獸鏡	七〇・七
	(二) 吳黃武七年神獸鏡	六〇
第三三	(一) 吳黃龍元年九月重列神獸鏡	六二・六三・六六・六七
	(二) 吳黃龍元年四月神獸鏡	六二
第三四	(一) 傳紹興出土吳赤烏元年五月半圓方形帶神獸鏡	六四
	(二) 吳赤烏元年半圓方形帶神獸鏡	六四・六五
第三五	(一) 吳赤烏元年半圓方形帶神獸鏡	六五・六六
	(二) 甲斐國西八代郡大塚村古墳出土吳赤烏元年半圓方形帶神獸鏡	六七
第三六	攝津國川邊郡小濱村大字安倉古墳出土吳赤烏七年半圓方形帶神獸鏡及出土	
	古墳石室	六八・六九
第三七	(一) 吳赤烏元年半圓方形帶神獸鏡拓影	六九・七〇
	(二) 吳赤烏九年半圓方形帶神獸鏡拓影	七〇・七一
第三八	(一) 吳建興二年半圓方形帶神獸鏡拓影	七一
	(二) 吳建興二年半圓方形帶神獸鏡拓影	七一
第三九	(一) 吳建興二年半圓方形帶神獸鏡	六九・七〇
	(二) 吳太平元年神獸鏡	七三・七四
第四〇	(一) 傳紹興出土吳五鳳元年半圓帶神獸鏡	七二・七三

第四一

(二) 傳紹興出土吳五鳳三年神獸鏡 三

(一) 傳紹興出土吳太平元年五月半圓方形帶神獸鏡 四·五

(二) 吳太平元年半圓方形帶神獸鏡拓影 五

第四二

(一) 傳紹興出土吳太平元年半圓方形帶神獸鏡 五·六

(二) 吳太平□年方格乳紋鏡 六·三

第四三

(一) 吳太平二年半圓方形帶神獸鏡拓影 六

(二) 吳太平二年半圓方形帶神獸鏡拓影 六·八

第四四

(一) 吳太平二年半圓方形帶神獸鏡 六·九

(二) 吳太平元年半圓方形帶神獸鏡 六

第四五

(一) 吳永安元年半圓方形帶神獸鏡拓影 八·一

(二) 吳永安元年半圓方形帶神獸鏡拓影 八·二

第四六

(一) 吳永安元年二月半圓方形帶神獸鏡 八·三

(二) 傳紹興出土吳永安二年七月半圓方形帶神獸鏡 八·五

第四七

(一) 吳永安二年七月半圓方形帶神獸鏡拓影 八

(二) 吳永安四年半圓方形帶神獸鏡 八·六

第四八

吳永安四年重列神獸鏡 八·六·三·二七

第四九

(一) 吳永安五年神獸鏡 八

第五〇	(一) 吳永安六年八月半圓方形帶神獸鏡拓影	八九·九〇
	(二) 吳永安六年正月半圓方形帶神獸鏡	八八·八九
第五一	(一) 傳紹興出土吳寶鼎元年十月半圓方形帶神獸鏡	九〇·九一
	(二) 傳紹興出土吳寶鼎二年四月半圓方形帶神獸鏡	九三·九四·二四〇
第五二	(一) 南京出土吳寶鼎三年五月半圓方形帶神獸鏡	九四·九五
	(二) 吳鳳皇元年五月半圓方形帶神獸鏡拓影	九五
第五三	(一) 傳紹興出土吳鳳皇元年九月半圓方形帶神獸鏡	九六·二四〇
	(二) 傳紹興出土吳鳳皇元年六月半圓方形帶神獸鏡	九六·九七
第五四	(一) 傳紹興出土吳天紀元年閏月重列神獸鏡	九七·九八·二六·二七
	(二) 傳紹興出土吳天紀元年半圓方形帶神獸鏡	九七
第五五	(一) 吳天紀二年重列神獸畫象鏡	九九·一〇〇
	(二) 吳天紀四年半圓方形帶神獸鏡拓影	一〇〇·一四〇
第五六	西晉泰始六年畫文帶環狀乳神獸鏡	一〇一·一〇一·二九·一三〇·一三七·二四〇
第五七	西晉泰始七年葉文帶神獸鏡	一〇一·一〇三
第五八	西晉泰始九年畫文帶神獸鏡	一〇三·一〇四·二九·一三〇·一三七
第五九	(一) 西晉泰始十年半圓方形帶神獸鏡	一〇四·一〇五

第六〇

(二) 西晉太康二年三月半圓方形帶神獸鏡 一〇七
(一) 西晉太康元年半圓方形帶神獸鏡拓影 一〇六・一〇七

(二) 西晉太康元年八月半圓方形帶神獸鏡拓影 一〇五・一〇六

第六一

(一) 西晉太康三年二月半圓方形帶神獸鏡拓影 一〇九・一一〇

(二) 西晉太康三年十二月半圓方形帶神獸鏡拓影 一一一・一四〇

第六二

(一) 西晉太康三年六月半圓方形帶神獸鏡 一一〇

(二) 西晉太康四年半圓方形帶神獸鏡 一二一・一二二・一四〇

第六三

(一) 西晉元康元年半圓方形帶神獸鏡圖 一二二

(二) 西晉元康八年神獸鏡拓影 一二三

第六四

(一) 東晉建武□年半圓方形帶神獸鏡 一二四

(二) 東晉咸康三年半圓方形帶神獸鏡 一二四・一二五

第六五

(一) 東晉太和元年半圓方形帶神獸鏡 一二五・一二六

(二) 傳紹興出土東晉太和元年五月半圓方形帶神獸鏡 一二六・一二八・一四〇

第六六

西秦太和四年半圓方形帶神獸鏡(上)及拓影(下) 一二八

第六七

南齊建武五年畫文帶神獸鏡 一二九・二〇・三九・三〇・三七・四〇

第六八

(一) 半圓方形帶神獸鏡 一二三

(二) 半圓方形帶神獸鏡拓影 一二三

第六九

(一) 盤龍獸帶鏡(元康三年の銘を附したものの) 一四六・一四九

第七〇

(二) 菱形文帶神獸鏡(元初元年の銘を附したものの) 拓影 一五〇
(一) 元初四年の銘を刻出した鏡 一五一・一五二

第七一

(二) 永和元年の銘を刻出した鏡 一五一・一五二
(一) 建安元年の銘を附せる贗作の鏡範(其二) 一五三・一五五

第七二

(二) 同 上鏡範(其二) 拓影 一五五
(一) 畫文帶環狀乳神獸鏡の一例 一五五

第七三

(二) 贗作の畫象鏡の銘範 一五五
(一) 建安元年の銘を附した畫文帶神獸鏡(其二) 一五五・一五六

第七四

(二) 同 上鏡(其二) 拓影 一五五・一五六
(一) 傳紹興出土半圓方形帶神獸鏡 一五七・一五八

(二) 紀年を偽刻した後の同鏡 一五七・一五八

挿圖目次

第一圖	永安四年重列神獸鏡拓影	七頁
第二圖	東魏天平三年雙獸鏡	三〇
第三圖	畫文帶狻猊鏡	三九
第四圖	漢精白鏡例	三三
第五圖	漢內行花文鏡例	三三
第六圖	便化した支那出土夔鳳鏡例	三三
第七圖	位至三公雙獸鏡	三四
第八圖	紀年諸鏡斷面圖	三七
第九圖	建安元年の銘を容れた盤龍獸帶鏡	四〇

漢三國六朝紀年鏡圖說

梅 原 末 治

序 說

東西の古代文化圈に行はれた金屬鏡のうち、支那の鏡鑑は最も特徴の多い工藝品として、兼てその背文の上に同國の古文化を反映してゐることは極めて著しい事實である。従つてこの種遺品に就いての關心は早く宋時代に興つて、爾來少からざる關係の著録を見受けたことであり、うちに優れた考察を示したものもある。鏡鑑に關する今人の知見は其等先人の業績に負ふものであるのは改めて言ふまでもないが、聯關した諸種の研究の基礎をなすその變遷に關する分野に至つては、支那本土では古く樹てられた古鏡をば漢唐の二つとする大まかな區分が久しく踏襲せられて、殆んど反省を加へられる事なく近時に及んだのであつて、これが再檢討は主として大正時代に入つてから本邦學者の努力に依ると稱しても過言ではない。而して之が準據の一として取り上げられたのは遺品自體に鑄造の年時を明示した紀年鏡で

あつたのである。

支那の古鏡に時に鑄造の年時を現はしたものの存することは、彼地でも注意に上つて吳式芬の『攷古錄金文』をはじめ、これを録した著録は必ずしも其數に乏しくなく、それ等の中には錢坫の『浣花拜石軒鏡銘集』孫詒讓の『籀膏述林』の如く、銘文に就いて傾聽すべき解釋を加へたものをも存する。併し是等を聚成して鏡式の沿革を辿らうとする試みは故羅振玉先生が大正五年に我が京都で『古鏡圖錄』を上梓せられるまでは何人に依つても行はれなかつた。

本邦では同書の出版に先立つ大正三年八月紀伊國伊都郡隅田八幡宮の所藏に係る我が上古鑄造の紀年鏡が學界に紹介せられたのを契機として、故高橋健自博士に依つて先づ此類に考察が加へられ、〔在銘最古日本鏡〕『考古學雜誌』第五卷第二號及六朝以前の年號銘ある古鏡に就いて〔同誌第五卷第四號〕故大村西崖氏『支那美術史彫塑篇』山田孝雄博士『古鏡の銘について』〔人類學雜誌』第三卷〕また相次いで論攷を發表したが、特に故富岡先生はその前後支那古鏡鑑の綜合的研究に着手するに當つて多數の新資料を紹介すると共に、銘文に新解釋を加へてその優れた年代觀の基礎の一つをこの上に求められ、また古鏡を通じて我が古代の文化に關する新見解を公にせらるるに及んで〔同氏遺著『古鏡の研究』所收諸論文參照大いに紀年鏡に對する學界の興味を喚起し、遂に考古學會から『紀年鏡鑑圖譜』刊行の機運を作ることになつた。而して歐米の學者また右の富岡先生の論攷を通じて紀年鏡の存在を知り、これに注意を拂ふ様になつたこと『通報』(Young Pao)所掲のベリオ教授(Prof. Paul Pelliot)の一文の示す如くである。